

## 人間福祉研究第24号発刊にあたって

李木 明德

広島文教女子大学（現 広島文教大学）に人間福祉学科が開設されて26年が経ち、2026年4月には第27期の新生を迎えます。紆余曲折ありながら人間福祉学科として四半世紀が過ぎたことに感慨深いものがあります。そして、現場の指導者となった卒業生と出会う機会が増えてくると、人間福祉学科が福祉領域で一定の役割を果たしていることを実感するとともに、改めてその存在の意義について考えます。

人間福祉学研究第24号には原著論文3編と研究ノート1編、実践報告1編が納められています。それぞれがユニークなテーマです。松田光一郎氏による原著論文は、発達障害者が感じる色の好みとイメージの特徴について、障害者施設利用者を対象とした調査から明らかにしています。井上幸希氏による原著論文は、アメリカ合衆国においてインターネットにおける年齢確認と成人の表現の自由との関係が争われたPaxton判決を基にインターネットにおける年齢確認が及ぼす影響について考察しています。井上一洋氏による原著論文は、アメリカ合衆国における法にもとづく人種的隔離と事実上の人種的隔離という2つの概念を用いて、法的には平等と言われながらも事実上の人種的隔離の進行が特定のグループにスティグマを生じさせてしまうことについて検討を行っています。

また棚田裕二氏による研究ノートでは、介護福祉士養成課程で標準的に使用されている介護過程テキストからアセスメントの位置づけ及び情報収集から生活課題抽出に至る思考過程のとらえ方を整理・比較し、思考過程の可視化が介護過程教育においては重要であることを示唆しています。

さらに中嶋一恵氏らによる実践報告では、2025年度人間福祉学科で取り組んだ学生のキャリアに対する関心を高める取り組みから自らの実践を報告した学生と聞き手として参加した学生の意識についてアンケート調査を行い、その結果を報告しています。

5編に目を通していくと、(利用者)理解、人権、教育、キャリアというワードが浮かび上がります。これらに関連付けると、「質の高い教育を通して福祉の利用者理解を深め、人権意識の高い人材を養成していく」そして「学生一人ひとりが自らのキャリアを考えていけるようになることを目指す」となります。これは人間福祉学科の使命です。

しかし自らのキャリアを福祉職に向けたにもかかわらず、すぐに離職してしまう卒業生も多数おられます。これには複数の要因がかかわっていると思いますが、至極残念なことです。そこで今年度、人間福祉学科とともに歩む人間福祉学会では、同じ職場で長年勤務をされている卒業生に登壇いただき、実践の中での苦労や葛藤、挫折体験やその克服のための工夫、そしてやりがいについてお話をいただきました。詳細については人間福祉学会活動報告の中に掲載しておりますので、目を通していただけたら幸いです。

人間福祉学会は、学びの場であると共に、「文教だからこそ」の支援観やつながりを確認し、形にする場です。この学会を中心に、これからもさらに多くの学びの機会や在学生と卒業生のつながりを提供していくことができたらと考えています。

皆様におかれましては、ぜひ人間福祉学会に参加いただくとともに、今後ともご支援賜りますようよろしくお願いいたします。